

## スポーツに対する社会態度の因子分析的研究

— H. J. アイゼンクの社会態度理論に準拠して —

日下 裕弘, 菅原 禮, 丸山 富雄

### 1. 序 論

1935年, G. W. オールポート (Allport) が態度を「個人がかかわりをもつあらゆる対象や状況に対する個人の反応に, 指示的あるいは力学的な影響を及ぼす, 経験により体制化された, 心的・神経的な準備状態である」<sup>1)</sup> ときわめて包括的な定義を行なって以来, 態度概念は, 従属変数としての人間の行動が独立変数としての生物学的, 心理学的, 社会学的要因によっていかに影響されるかを媒介する潜在変数として, 社会心理学上の重要なキー概念になってきた。しかしながら, 態度に関する定義はきわめて多く, 心理学, 社会学, 文化人類学などさまざまな学問領域の中で独自の発展をとげており, そこに一義性を求めることはむずかしい。

体育やスポーツに対する態度の研究はこれまでも数多くなされてきているが, それらの研究における態度の概念は, 一般に, 快・不快等の感情的要素や知識・意見・信念等の観念的要素などを含めた主体内部の価値意識や価値指向の総体としてとらえられているケースが多いようである。例えば, 永吉ら<sup>2)</sup>, 梅野ら<sup>3)</sup>, 長谷川ら<sup>4)</sup>, 波多野ら<sup>5)</sup>等の研究には, 好き・嫌いやおもしろい・つまらない等の主として感情的要素からのアプローチがみられ, C. L. ウェアー (Weir) ら<sup>6)</sup>や嘉戸<sup>7)</sup>等の研究では, 体育やスポーツの効果・機能の側面が重視されている。また, 前者と後者の両側面を視野に入れた研究としては, C. L. ウェアー<sup>8)</sup>, J. A. ヴェッセル (Wessel) ら<sup>9)</sup>, 丹羽・長沢ら<sup>10), 11), 12), 13)</sup>, 荒井ら<sup>14)</sup>, 西野ら<sup>15)</sup>, 岡沢ら<sup>16)</sup>等のものがある。さらに徳永らは, スポーツ行動の予測と診断に関する一連の研究<sup>17), 18), 19)</sup>において, スポーツ

に対する態度 (以下, スポーツ態度と略す) についてより包括的な検討を行ない, 態度を, 刺激と反応を仲介する媒介変数 (反応への先有傾向) であり, 後天的に形成された, 持続的で一貫性があるものとしてとらえ, その構成を, 認知的成分 (対象に対する評価あるいは知識・信念のことであり, 対象の属性に対して, 良い・悪い賛成・反対, 望ましい・望ましくないなどで表わされる), 感情的成分 (対象に対して抱く好悪感情, 快・不快感情のこと), 及び, 行為傾向的成分 (欲求や動機的側面をさし, 対象に対して, 受容・拒否, 接近・回避といった行動についての先有傾向をいう) の3成分から成るものとしている。

これらの研究成果についてはその対象や方法が一定でなく一概に総括することはできないが, こうした研究の枠組において共通していえることは, スポーツ態度の成分のうちで特に「認知的 (cognitive) 成分」 (即ち, スポーツに関する知識・意見・信念・観念がその内容となる) について, そのほとんどが体育やスポーツを行なう目的, 動機, 効果・効用, 機能についての分析に限定されており, スポーツに内在するより Societal なレベルでの価値意識, 例えば思想的, イデオロギー的な要素をもつ意識を把握しうる枠組もしくは態度尺度が欠落しているということである。それは, スポーツに対する社会的態度 (以下, スポーツ社会態度と略す) 理論の欠如であるといっていよう。

スポーツ社会態度に関する類似の研究としては, 公正, ベストを尽くす, 真剣, 礼儀等のスポーツ・モラル<sup>20)</sup>やスポーツ行動規範<sup>21)</sup>に関するものがあるが, これらはスポーツ社会態度の一側面を構成するものであり, より包括的な理

論と態度尺度の作成が望まれる。さらに、スポーツの組織化と個性化の軸からスポーツを類型化した荒井の研究<sup>22)</sup>や快楽・禁欲及び目的・手段の軸からスポーツ観を分類した佐伯の研究<sup>23)</sup>、及び、因子分析の手法を用いてスポーツの文化的特徴を明らかにしようとした丹羽・金子の研究<sup>24)</sup>は、そのモデル・枠組に態度の指向対象としてのスポーツ文化価値が内在している点できわめて参考になるものであるが、スポーツ態度そのものが主体の側の心理的要素と密接に結びついているものであるだけに、そうした要素をも含めた社会的態度理論が必要になってくる。

スポーツ社会態度には、個人のパーソナリティ特性や感情的要素といった主体の側の条件が投影されているはずであるし、また、社会意識やイデオロギーといった客観的、文化的条件によっても影響されているはずである。こうした諸条件を射程に入れた一貫性のあるスポーツ態度理論は構築され得ないものだろうか。

本研究は、スポーツ態度の一試論として、主として H. J. アイゼンク (Eysenck) の「社会態度」理論に依拠し、スポーツ社会態度の尺度を構成することを目的としている。

## 2. 方 法

### 1. H. J. アイゼンクの「社会態度」理論

心理学は生物科学と社会科学のちょうど接点に位置し、性格理論はこの両者を結びつけるきずなであるとするアイゼンクは、C. J. ユング (Jung), E. クレッチマー (Kretschmer), W. ヴント (Wundt) らの性格理論を発展的に継承

し、数量化、特に因子分析などの方法を用いて性格を階層的な構造をなすものとしてとらえ、性格を記述する主要な次元として、外向性—内向性と情緒安定性—不安定性という2つの次元を見い出した<sup>25)</sup>、<sup>注1)</sup>。アイゼンクの社会態度理論は、こうした彼の性格理論と方法が基礎になっている。1944年、アイゼンクは、これまでの態度に関する諸理論を検討しその中に共通する因子として急進—保守、及び、実践的—論理的の2つの軸(次元)を析出した<sup>26)</sup>。さらに、1954年、彼は社会態度を構成する2つの軸、即ち、急進—保守(R因子)、及び、強硬な心—柔和な心(T因子)の2つの次元をもつ「社会態度の2因子論」を発展させた。アイゼンクのこの理論は、彼の性格理論を社会態度の領域にまで拡張したものであり、このうちT因子については、W. ジェームズ (James) の硬い心—軟らかい心という、哲学者・思想家の気質分類<sup>注2)</sup>にヒントを得て解釈・命名したものである。しかもこの因子は、外向性—内向性の人格特性が社会態度の次元に投影されたものとみなされ、これが社会態度を構成するひとつの軸とされたのである。一方、R因子については、態度を測定した初期の研究者からすでに仮定してきた次元であり、進歩的—反動的、あるいは左—右と他に多くの名称で呼ばれてはいるが、帰するところでは同じ次元であるとされている。しかもこの因子は、下位次元として態度、習慣化された意見、及び特殊な意見の諸レベルによって構成されており(図1)、このイデオロギーもしくは超態度レベルにおける急進主義—保守主義の次元が社

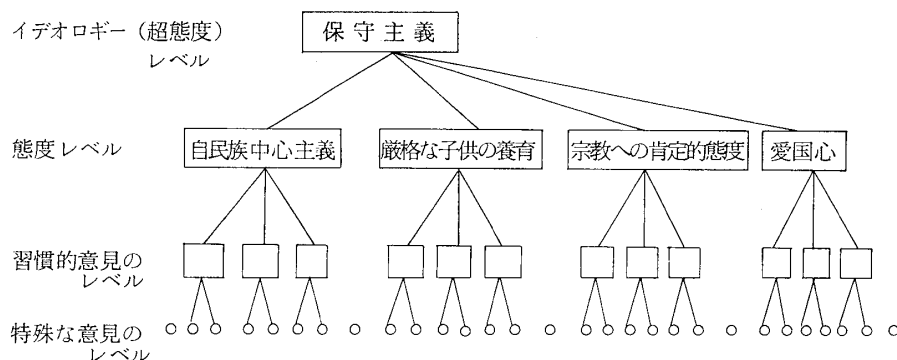


図1 意見 態度, 及びイデオロギーの関連図 (Eysenck, 1954.)

会態度を構成するもうひとつの軸とみなされている<sup>27)</sup>。さらに、1955年のこの研究及び後の実証的研究<sup>28), 29)</sup>等において、この考え方の妥当性を検討したあとで、これまでの態度及び価値に関する諸概念を、RとTの2因子に関連させ、それらの次元(態度概念・尺度)がいかに彼の直交2軸の社会態度モデルによってはっきりとさせ得るかを示すに至っている<sup>30)</sup>。(図2)

## 2. スポーツ社会態度の尺度構成

### (1) 態度次元の設定と質問項目

上述のアイゼンク理論及びその方法・枠組を参考にし、スポーツ社会態度を構成する次元として、伝統主義、権威主義、個人主義—集団主義、人道主義、平等主義、現実主義—理想主義、強堅な心—柔和な心、合理主義、禁欲主義等を予備的・仮説的に設定し、スポーツにおけ

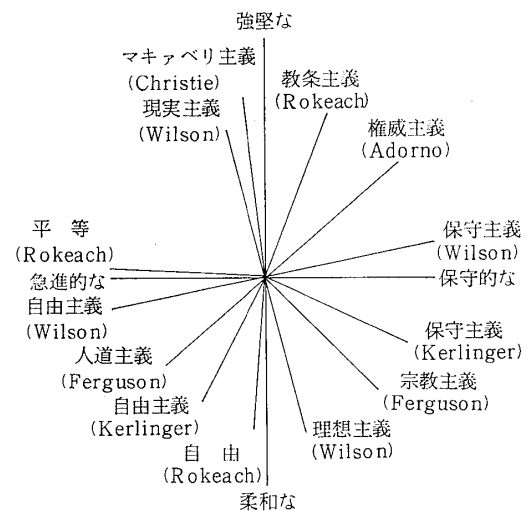


図2 RとTに関係するさまざまな概念の布置図 (Eysenck, 1978.)

るシンボル、競争、規範、組織、技術、施設・用具等の諸局面との関連から、次のような合計42の質問項目を作成した。

- |                                       |            |
|---------------------------------------|------------|
| Q ① 過去のクラブの栄光は尊重し、それを伝えるべきである         | (過去の栄光)    |
| Q ② クラブ旗はクラブを象徴するものであり、それに愛着を寄せるべきである | (クラブ旗)     |
| Q ③ スポーツは政治や企業に利用されるべきではない            | (自律性)      |
| Q ④ スポーツには堅苦しい信念や理屈は不要である             | (スポーツ信条)   |
| Q ⑤ スポーツは「道」(人間修養)を極める手段である           | (求道主義)     |
| Q ⑥ クラブの「しきたり」や慣習は大切に受け継ぐべきである        | (クラブのしきたり) |
| Q ⑦ クラブでの「しごき」は禁止すべきである               | (しごき)      |
| Q ⑧ 練習の無断欠席はあってはならない                  | (無断欠席)     |
| Q ⑨ ドーピングは認めてもよい                      | (薬物投与)     |
| Q ⑩ 一流のアマチュア選手であっても賞金は受け取るべきではない      | (賞金)       |
| Q ⑪ 少しぐらいのルール違反は大目にみてよい               | (ルール違反)    |
| Q ⑫ 規律を乱さないよう、集合時間は厳守すべきである           | (時間厳守)     |
| Q ⑬ スポーツマンは禁煙など、禁欲的生活に心掛けるべきである       | (禁欲)       |
| Q ⑭ 技術の優れている者が、クラブ内で権威を持つべきである        | (技術と権威)    |
| Q ⑮ レギュラーは練習時間やその他のことで優遇されるべきである      | (レギュラーの優遇) |
| Q ⑯ 試合では相手の技術や戦術を科学的に分析すべきである         | (科学的分析)    |
| Q ⑰ 勝負には勝たなければならない                    | (勝利主義)     |
| Q ⑱ 伝統的な練習は尊重し、それに従う方が望ましい            | (伝統的練習)    |
| Q ⑲ コーチは「俺について来い」式の方が望ましい             | (俺に着いて来い)  |
| Q ⑳ コーチの指導には服従すべきである                  | (コーチへの服従)  |
| Q ㉑ 自己を犠牲にしても、チームの為に貢献すべきである          | (自己犠牲)     |
| Q ㉒ スポーツでは根性ややる気を強調すべきである             | (根性)       |
| Q ㉓ スポーツでは倒れるほど練習することが大切である           | (鍛練主義)     |

Q 24	クラブにはOB会が是非必要である	(OB会)
Q 25	クラブのまとまりのためにはチームワークが最も必要である	(チームワーク)
Q 26	スポーツでは仲間との深い相互理解が得られなければならない	(相互理解)
Q 27	スポーツは国際親善, 国際友好の重要な手段となる	(国際親善)
Q 28	スポーツはできるだけハンディキャップや階級制を取り入れるべきである (ハンディキャップ制)	
Q 29	大会は, 機会を均等にするよう, リーグ戦 (総当たり) が望ましい	(リーグ戦)
Q 30	オリンピックでは国や民間企業が大いに協力すべきである	(民営オリンピック)
Q 31	スポーツは男女混合でする方がよい	(男女混合種目)
Q 32	科学偏重主義はスポーツを破壊する	(科学偏重主義)
Q 33	スポーツの施設や用具は規格通りのものを使用すべきである	(公認規格品)
Q 34	スポーツの発展のためには, 新しい施設や用具の開発は絶対に必要である (用具の開発)	
Q 35	ゲームの平等は, ルールによって保証されなければならない	(ルールと平等)
Q 36	ルールは神聖にして, 犯すべからざるものである	(ルールの神聖化)
Q 37	指導は監督以下官僚的な組織形態が望ましい	(官僚的指導組織)
Q 38	スポーツの本質は勝敗よりもゲームを楽しむことにある	(ゲームを楽しむ)
Q 39	スポーツは気軽にレクリエーションとして楽しむものである	(レクリエーション)
Q 40	スポーツをすることは時間の浪費である	(時間の浪費)
Q 41	競争のない野外でのスポーツを大いに奨励すべきである	(野外スポーツ)
Q 42	スポーツは新しい技術や記録への挑戦である	(技術・記録への挑戦)

注 ○印のついた項目は, 項目分析等の結果, 最終的に残った本調査の項目 (合計26項目) である。

表1は, スポーツ社会態度とこれらの質問項目との関連を示したものである。

表 1. スポーツ社会態度と質問項目

態度次元 諸局面	伝統主義	権威主義	個人主義 集団主義	人道主義	平等主義	現実主義 理想主義	強健な心 柔和な心	合理主義	禁欲主義	その他
スポーツ観 シンボル	過去の栄 光 クラブ旗					スポーツ の自律性	スポーツ信 条, レクリ エーション, 野 外スポーツ		求道主義, 技術・記録 への挑戦	時間の 浪費
規 範	クラブの しきたり	しごき	無断欠席	ドーピン グ	ルールと 平等	賞金	ルール違反, ルールの神聖 化, 時間厳守		禁欲	
技 術		技術と権 威			レギュラ ーの優遇			科学的分 析		
競 争							勝利主義 ゲームを 楽しむ			
練 習	伝統的練 習	俺について 来い, ユー チへの服従	自己犠牲					根性	鍛練主義	
組 織	OB会	チームワ ーク, 官僚的 指導組織		相互理解 国際親善	ハンディ キャップ制 リーグ戦	民営オリ ンピック	男女混合 種目			
施設・用具				科学偏重 主義				公認規格 品, 用具 の開発		

## (2) 予備調査と項目分析

昭和60年10月、仙台大学及び東北大学の学生、計144人を対象に2回の予備調査を実施し、大いに賛成（5点）、ある程度賛成（4点）、どちらとも言えない（3点）、やや反対（2点）、全く反対（1点）の5段階尺度で回答を得た。それらの回答から各個人の合計点を算出し、得点の高い者25%を上位群、得点の低い者25%を下位群とし、上位下位分析法による項目分析を行なった。さらに、上位下位群間に有意差が認められた項目（ $p < 0.05$ ）の中から、きわめて相関の高いものの一方を削除するという作業を行なった結果、最終的に上記の26項目が弁別力のある項目として採択された。<sup>注2)</sup>

表2 対象者の内訳（人数）

年齢 性	所属	20代	30代	40代	50代	計	
		20代	30代	40代	50代		
公共施設	男	25	24	19	15	83	278
	女	21	72	81	21	195	
民間施設	男	30	23	14	5	72	106
	女	19	7	6	2	34	
指導者	男	2	3	21	12	38	65
	女	4	4	14	5	27	
計	男	57	50	54	32	193	449
	女	44	83	101	28	256	
	計	101	133	155	60		

## 3. 結果と考察

## 1. 本調査の因子分析結果

本調査は、昭和60年12月から昭和61年1月にかけて仙台市の公共体育施設（体育館、武道館）のクラブ会員、民間スポーツ施設のクラブ会員、ならびに仙台市および宮城県体育協会に登録されている体育・スポーツ指導員のうち学生を除く成人を対象に、留置法および一部郵送法によって実施した。有効回収数（率）は449（48.0%）であった。対象者の内訳は表2の通りである。

表3は、本調査で用いられた26の質問項目に対する回答者の平均得点、および標準偏差である。

これらの項目に対する被調査者の回答から、主成分分析によって因子負荷行列を求めた。その際、因子数の決定には固有値1.0以上という基準を用い、5因子を抽出した。表4は、5因子の固有値、および累積寄与率を抽出順に示したものである。これにより、5因子で全分散の41.9%が説明されている。

そこで、これら5因子について Normal Vari-max 法による軸の直交回転を施し、回転後の因子負荷行列を求めた。（表5）

表3 質問項目に対する回答者の平均

質問項目	Mean	S. D.
Q 1 レクリエーション..... として楽しむ	4.39	0.83
Q 2 過去の栄光.....	3.62	0.91
Q 3 オリンピック.....	4.11	0.87
Q 4 クラブ旗.....	3.44	0.95
Q 5 道（人間修養）.....	3.69	0.99
Q 6 倒れるほどの練習.....	2.28	1.10
Q 7 しきたりや慣習.....	3.24	1.03
Q 8 時間の浪費.....	1.23	0.61
Q 9 無断欠席.....	3.80	1.14
Q10 賞 金.....	2.98	1.01
Q11 禁欲生活.....	2.78	1.13
Q12 技術・権威.....	2.16	1.09
Q13 科学的分析.....	3.72	0.94
Q14 勝たねばならぬ.....	3.63	1.05
Q15 男女混合.....	3.18	0.89
Q16 ゲームを楽しむ.....	3.55	1.06
Q17 俺についてこい.....	3.07	1.06
Q18 機会均等.....	3.59	0.86
Q19 自己犠牲.....	2.85	1.02
Q20 野外スポーツ.....	3.71	0.99
Q21 O B 会.....	3.21	0.89
Q22 チームワーク.....	4.46	0.67
Q23 科学偏重主義.....	3.09	0.79
Q24 規格品.....	3.98	0.92
Q25 ルールの神聖化.....	4.12	0.89
Q26 挑 戦.....	3.92	0.87

（5点 大いに賛成，4点 ある程度賛成，3点 どちらとも言えない，2点 やや反対，1点 全く反対）

表4 各因子の固有値および累積寄与率

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ
E. V.	4,4050	2,0578	1,7142	1,3908	1,3434
C. C. R.	0.1604	0.2485	0.3145	0.3679	0.4196

表5 5因子での回転後の因子負荷行列

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通生(h <sup>2</sup> )
Q 1	.124	.455	-.228	-.213	.027	.321
Q 2	.718	-.038	.069	-.051	.087	.532
Q 3	.599	.069	.076	.132	-.205	.430
Q 4	.674	.082	.148	.111	.083	.503
Q 5	.653	-.012	.159	.173	.055	.485
Q 6	.326	-.195	.621	.002	-.130	.548
Q 7	.497	-.025	.265	.148	.245	.401
Q 8	.045	.013	.171	-.362	.221	.211
Q 9	.055	-.039	.145	.476	.093	.261
Q 10	-.046	.098	.146	-.027	.537	.323
Q 11	.039	.028	.530	.006	.348	.405
Q 12	.054	-.067	.696	-.059	.191	.532
Q 13	.010	.175	.353	.511	-.151	.440
Q 14	.106	-.233	.413	.489	-.078	.483
Q 15	-.030	.554	.159	-.084	-.009	.341
Q 16	-.002	.723	-.097	-.183	.145	.588
Q 17	.200	.008	.449	.153	.150	.288
Q 18	-.055	.501	.067	.358	-.009	.387
Q 19	.175	.145	.574	.160	-.131	.425
Q 20	.085	.653	-.024	.057	.012	.437
Q 21	.316	.052	.284	.120	.055	.201
Q 22	.418	.122	-.143	.493	-.010	.453
Q 23	.113	.061	.010	.037	.707	.509
Q 24	.221	-.195	-.111	.498	.461	.561
Q 25	.241	-.115	.044	.577	.223	.456
Q 26	.284	-.121	.136	.515	-.015	.380
寄 与	4,405	2,057	1,714	1,398	1,343	10,908
共通因子分散 に対する%	40.4	18.9	15.7	12.8	12.3	100.0(%)
全分散に対す る%	16.9	7.9	6.6	5.4	5.2	42.0(%)

## 2. 因子の解釈と命名

抽出された5因子は、先に仮説的に設定した社会態度の諸次元と複雑に結びついているものであった。

因子の解釈、および命名は、原則として因子負荷量が0.4以上の項目を取りあげ、それらの内容を中心に行なった。

## 第Ⅰ因子に高い負荷量を示した項目は次のものである。

項目番号		因子負荷量
Q 2	過去のクラブの栄光は尊重し、それを伝えるべきである	0.718
Q 4	クラブ旗はクラブを象徴するものであり、それに愛着を寄せるべきである	0.674
Q 5	スポーツは「道」（人間修養）を極める手段である	0.653
Q 3	オリンピックでは国や民間企業が大いに協力すべきである	0.599
Q 7	クラブの「しきたり」や慣習は大切に受け継ぐべきである	0.497
Q 8	クラブのまとまりのためにはチームワークが最も必要である	0.418

この因子は、過去の栄光、旗、道、しきたり、慣習等わが国の伝統的な価値意識の内容を含んでおり、個人よりも集団や集団規範を優先させていることから、伝統・集団指向の因子であると考えられる。そこでこの因子を伝統主義と名づけた。

## 第Ⅱ因子に高い負荷量を示した項目は次のものである。

項目番号		因子負荷量
Q 16	スポーツの本質は勝敗よりもゲームを楽しむことにある	0.723
Q 20	競争のない野外でのスポーツを大いに奨励すべきである	0.653
Q 15	スポーツは男女混合でする方がよい	0.554
Q 18	大会は、機会を均等にするよう、リーグ戦（総当たり）が望ましい	0.501
Q 1	スポーツは気軽にレクリエーションとして楽しむものである	0.455

この因子は、競争を避け、男女混合で行なうなどの気軽に楽しいスポーツに指向するものと考えられることから、娯楽主義と名づけた。

## 第Ⅲ因子は次の項目に高い負荷量を示した。

項目番号		因子負荷量
Q 12	技術の優れている者が、クラブ内で権威をもつべきである	0.696
Q 6	スポーツでは倒れるほど練習することが大切である	0.621
Q 19	自己を犠牲にしても、チームのために貢献すべきである	0.574
Q 11	スポーツマンは禁煙など、禁欲的生活に心掛けるべきである	0.530
Q 17	コーチは「俺についてこい」式の方が望ましい	0.449
Q 14	勝負には勝たねばならぬ	0.413

この因子は、常に禁欲に心掛け、チームのために自己を犠牲にし、勝利に向かって猛烈な練習をする監督・コーチ中心の権威主義的な運動部に特徴的なものであり、権威・勝利指向の因子であると考えられることから、権威主義と名づけた。

## 第Ⅳ因子は次の項目に高い負荷量を示した。

項目番号		因子負荷量
Q 25	ルールは神聖にして、犯すべからざるものである	0.577
Q 26	スポーツは新しい技術や記録への挑戦である	0.515
Q 13	試合では相手の技術や戦術を科学的に分析すべきである	0.511
Q 24	スポーツの施設や用具は規格通りのものを使用すべきである	0.498
Q 22	クラブのまとまりのためにはチームワークが最も必要である	0.493
Q 14	勝負には勝たねばならぬ	0.476
Q 9	練習の無断欠席はあってはならない	0.476

この因子には、勝利を前提とした上で集団の規範やルールを厳守し、規格通りのものを用いて科学的・合理的にスポーツを行なおうとする態度が看取でき、いずれの場合にも、判断の基

準は主体の外部に客観的に存在しているものと考えられる。従ってここでは一応、合理主義と命名しておこうと思う。

第Ⅴ因子に高い負荷量を示した項目は次のものである。

項目番号	因子負荷量
Q 23 科学偏重主義はスポーツを破壊する	0.700
Q 10 一流のアマチュア選手であっても賞金は受け取るべきではない	0.537
Q 24 スポーツの施設や用具は規格通りのものを使用すべきである	0.469
Q 11 スポーツマンは禁煙をど、禁欲的生活に心掛けるべきである	0.348

この因子には、人間中心的な旧来のアマチュアリズムを想起させる要素があるが、項目数が少なく、一義的な解釈が困難であるため、因子の命名は行なわないことにした。

以上、因子分析の結果から5因子が抽出され、その中の解釈可能な4因子に、それぞれ「伝統主義」、「娯楽主義」、「権威主義」、「合理主義」因子と命名した。これらの因子は、先に仮説的に設定したスポーツ社会態度のより一般的な因子であるが、因子Ⅰ、Ⅲ、Ⅳは、わが国の伝統的なスポーツ観と共通する部分を多く含んでいるものと思われる。

そこで、主因子解で得られた5因子についてアイゼンクの2因子モデルを simulate する因子の組み合わせを探索した結果、主因子解の最初の2因子をバリマックス回転することによってきわめて類似したパターンを構成できることが判明した。それらをそれぞれ因子A、因子Bと呼ぶことにする。

### 3. スポーツ社会態度の2因子論

表6は、これら2つの因子（因子A、因子B）について回転させた後の因子負荷行列である。

因子Aに高い負荷量を示した項目は次のようなものである。

項目番号	因子負荷量
Q 5. 「道」（人間修養）	0.614
Q 4. クラブ旗	0.594
Q 7. 「しきたり」や慣習	0.588
Q 14. 勝たねばならぬ	0.524

表6 2因子での回転後の因子負荷行列

	因子 A	因子 B	共通性(h <sup>2</sup> )
Q 1	-.149	.578	.290
Q 2	.503	.137	.272
Q 3	.465	.114	.229
Q 4	.594	.197	.392
Q 5	.614	.084	.384
Q 6	.521	-.178	.303
Q 7	.588	.074	.352
Q 8	-.023	.136	.019
Q 9	.371	-.128	.154
Q 10	.128	.180	.048
Q 11	.368	.064	.139
Q 12	.404	-.045	.165
Q 13	.418	-.005	.175
Q 14	.524	-.350	.398
Q 15	.005	.516	.267
Q 16	-.134	.748	.578
Q 17	.471	.013	.222
Q 18	.166	.364	.160
Q 19	.469	.072	.225
Q 20	.057	.616	.383
Q 21	.427	.078	.188
Q 22	.448	.092	.209
Q 23	.226	.202	.092
Q 24	.430	-.157	.209
Q 25	.518	-.152	.292
Q 26	.520	-.185	.305
寄 与	4,405	2,057	6,462
共通因子分散に対する%	68.2	31.8	100.0(%)
全分散に対する%	16.9	7.9	2.49(%)



Q 6.	倒れるほどの練習	0.521
Q 26.	挑 戦	0.520
Q 25.	ルールの神聖化	0.518
Q 2.	過去の栄光	0.503
Q 17.	「俺についてこい」	0.471
Q 19.	自己犠牲	0.469
Q 3.	オリンピック	0.465
Q 22.	チームワーク	0.448
Q 24.	規格品	0.430
Q 21.	OB会	0.427
Q 13.	科学的分析	0.418
Q 12.	技術・権威	0.404

この因子には、わが国の伝統的なスポーツ信条が含まれており、勝利主義、鍛練主義的な要素が強い。そこでこの因子は、アイゼンクの保守主義に対応する、もしくは高い相関のある因子であると推定できることから、「スポーツ保守主義」と命名した。

因子Bに高い負荷量を示した項目は次のとおりである。

項目番号	因子負荷量
Q 16. ゲームを楽しむ	0.748
Q 20. 野外スポーツ	0.616
Q 1. 気軽なレクリエーション	0.518
Q 15. 男女混合	0.516
⋮	⋮
Q 14. 勝たねばならぬ	-0.350(反対類型)

この因子は、先に「娯楽主義」と解釈・命名した因子とほぼ同じであるが、アイゼンク(1978年)がE. R. JaenschのS型—J型パーソナリティ・タイプの例を引き出し、内向性と結びつけることができるS型は、「いちゃついたスポーツ」(Poussiersporte)、即ち、両性がいっしょに集まってできるスポーツに興味を示す<sup>30)</sup>といていることを考慮すると、この因子はアイゼンクの「柔和な心」に対応する、もしくは関連の深い因子であると推定してよいだろう。ここでは一応、「娯楽指向」と命名した。

以上の考察をもとに、スポーツ保守主義の軸

と娯楽指向の軸によって構成される平面上に各項目の因子負荷量をプロットしたのが図3である。

#### 4. 結 語

##### ——まとめと今後の課題——

以上、アイゼンクの社会態度理論に準拠して、スポーツ社会態度の尺度を構成した。

本研究において我々はまず、アイゼンクの経験的調査から得られた諸態度次元を参考に、スポーツ社会態度を構成する次元として、伝統主義、権威主義、個人主義—集団主義、人道主義、平等主義、現実主義—理想主義、強堅な心—柔和な心、合理主義、禁欲主義等を予備的・仮説的に設定し、2回の予備調査と項目分析の後に、26の質問項目を作成した。次に、定期的にスポーツを行なっている仙台市の成人を対象にこの調査を実施し、因子分析の結果、5つの因子を抽出し、そのうち4つの因子についてそれぞれ、伝統主義(第Ⅰ因子)、娯楽主義(第Ⅱ因子)、権威主義(第Ⅲ因子)、合理主義(第Ⅳ因子)と命名した。さらに、因子Ⅰ、Ⅲ、Ⅳの内容がわが国の伝統的なスポーツ信条と共通する部分を多くもっていると思われることから、また、主因子解で得られた5因子についてアイゼンクの2因子モデルを探索した結果、主因子解の最初の2因子をバリマックス回転させることによってきわめて類似したパターンを構成できることが判明したことから、2つの因子(因子A、及び、因子B)での回転を試みた。結果は、アイゼンクの2因子論、即ち、保守主義—急進主義(R因子)の次元と強堅な心—柔和な心(T因子)の次元の2軸直交理論に対応する、もしくは相関が高いと思われる因子・次元が抽出でき、それぞれ「スポーツ保守主義」、「娯楽指向」と命名した。かくして、スポーツ社会態度の尺度構成の試みは、一応、納得のいく結果を得ることができたといっていよう。

しかしながら、アイゼンクの「イデオロギー」、「保守—急進」、「強堅な心—柔和な心」等の概念規定には曖昧なところが多く、彼の理論

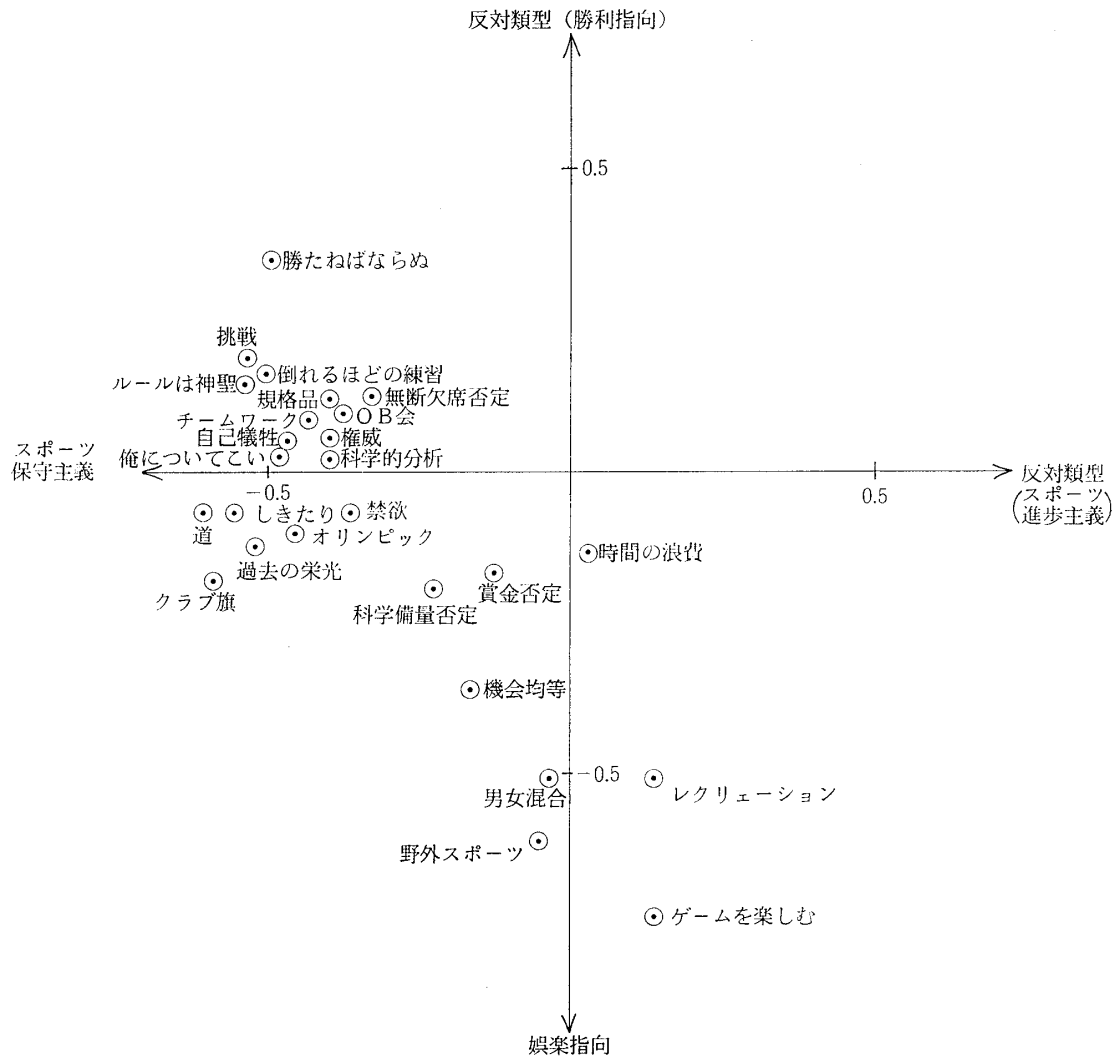


図3 スポーツ社会態度（スポーツ保守主義と娯楽主義）に関する諸態度の位置づけ

それ自体、ひとつのパラダイム（範例）にすぎない。従って我々のスポーツ社会態度の試論に関しても、態度次元・尺度の仮説的設定の時点ですでに概念的、理論的な検討が不十分にならざるを得なかったし、質問項目にもかなりの偏りがみられた。その結果、抽出した因子の解釈・命名も厳密に一義的なものであるとはいえないものとなった。

スポーツにおける思想、イデオロギー、もしくは価値意識等を射程に入れた態度理論の構築のためには、より広範な領域からの態度次元の検討とより精密な実証的分析が必要である。また、スポーツ態度が形成される要因にはスポーツ独自のものも含めてさまざまなものが考えら

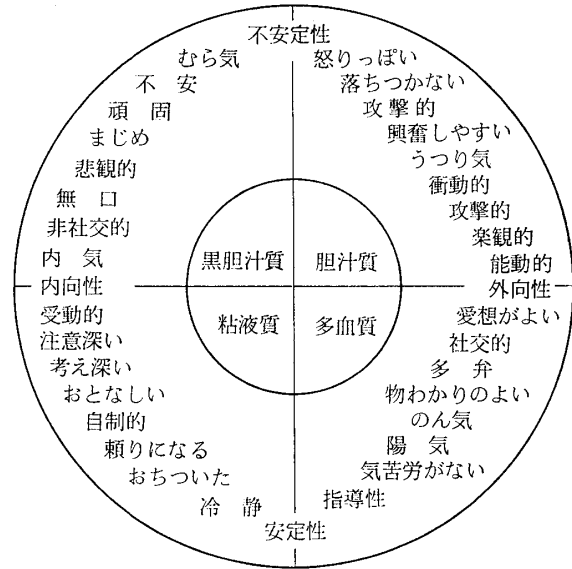
れるが、そうした要因との関連においてより吟味された具体的な質問項目を作成する必要がある。

さらに、歴史的、社会的背景や価値観の異なる英国や米国で発展してきたアイゼンクの社会態度調査をそのまま利用することのむずかしさもあって、社会態度一般とスポーツ態度との関連の分析をすることができなかった。

以上の反省点が今後に残された課題である。

本研究は、昭和60・61年度文部省科学研究費を得て行なわれた「スポーツと社会階層に関する実証的研究」（代表 菅原 禮）の一部である。

注 1) 右図は、アイゼンク (1964) が、  
4つの気質に関するガレヌスの性  
格理論 (内円) と、性格構造につ  
いての近代の実験的統計的研究  
(外円) の結果を示したものであ  
る。



(MPI 研究会編, 新性格検査法, p11 所収)

注 2) 本調査の質問項目は次のとおりである。

スポーツに対する意識について。次の意見に対し、あなたはどの程度賛成ですか。該当する箇所に  
○印をつけてください。

	5 大いに賛成	4 ある程度賛成	3 どちらでもない	2 やや反対	1 全く反対
1. スポーツは気軽にレクリエーションとして楽しむものである……………	5	4	3	2	1
2. 過去のクラブの栄光は尊重し、それを伝えるべきである……………	5	4	3	2	1
3. オリンピックでは国や民間企業が大いに協力すべきである……………	5	4	3	2	1
4. クラブ旗はクラブを象徴するものであり、それに愛着を寄せる べきである……………	5	4	3	2	1
5. スポーツは「道」(人間修養)を極める手段である……………	5	4	3	2	1
6. スポーツでは倒れるほど練習することが大切である……………	5	4	3	2	1
7. クラブの「しきたり」や慣習は大切に受け継ぐべきである……………	5	4	3	2	1
8. スポーツをすることは時間の浪費である……………	5	4	3	2	1
9. 練習の無断欠席はあってはならない……………	5	4	3	2	1
10. 一流のアマチュア選手であっても賞金は受け取るべきではない……………	5	4	3	2	1
11. スポーツマンは禁煙など、禁欲的生活に心掛けるべきである……………	5	4	3	2	1
12. 技術の優れている者が、クラブ内で権威を持つべきである……………	5	4	3	2	1
13. 試合では相手の技術や戦術を科学的に分析すべきである……………	5	4	3	2	1
14. 勝負には勝たなければならない……………	5	4	3	2	1

15. スポーツは男女混合ですの方がよい……………	5	4	3	2	1
16. スポーツの本質は勝敗よりもゲームを楽しむことにある……………	5	4	3	2	1
17. コーチは「俺について来い」式の方が望ましい……………	5	4	3	2	1
18. 大会は、機会を均等にしよう, リーグ戦(総当たり)が望ましい……………	5	4	3	2	1
19. 自己を犠牲にしても, チームの為に貢献すべきである……………	5	4	3	2	1
20. 競争のない野外でのスポーツを大いに奨励すべきである……………	5	4	3	2	1
21. クラブにはOB会が是非必要である……………	5	4	3	2	1
22. クラブのまとまりのためにはチームワークが最も必要である……………	5	4	3	2	1
23. 科学偏重主義はスポーツを破壊する……………	5	4	3	2	1
24. スポーツの施設や用具は規格通りのものを使用すべきである……………	5	4	3	2	1
25. ルールは神聖にして, 犯すべからざるものである……………	5	4	3	2	1
26. スポーツは新しい技術や記録への挑戦である……………	5	4	3	2	1

#### 引用・参考文献

- 1) G. W. Allport, "Attitudes" in C. Murchison, (ed.), A Handbook of Social Psychology, Clark University Press, Worcester, Mass., 1935, pp. 798-844.
- 2) 永吉宏英, 江橋慎四郎, 桑野 豊, 島崎仁, スポーツ活動成立要因に関する研究—林の数量化理論第Ⅱ類を用いて—, 日本体育会第25回大会号, 1974, p. 187.
- 3) 梅野圭史, 辻野 昭, 体育科の授業に対する態度尺度作成の試み, 体育学研究, Vol. 25, No. 2, 1980, pp. 139-148.
- 4) 長谷川美恵子, 酒井紀子, ダンス嫌いの要因の分析—自己概念との関連から—体育学研究, Vol. 26, No. 1, 1981, pp. 1-10.
- 5) 波多野義郎, 中村精男, 「運動ざらい」の生成機序に関する事例研究, 体育学研究, Vol. 26, No. 3, 1981, pp. 177-187.
- 6) C. L. Wear, "The Evaluation of Attitude Toward Physical Education as an Activity Course", Research Quarterly, Vol. 22, No. 3, 1951, pp. 14-126.
- 7) 嘉戸 脩, 「運動クラブの運動欲求変容機能に関する一考察—社会人の運動・スポーツ活動との関連から—」, 体育社会学研究 3. 体育とスポーツ集団の社会学, 体育社会学研究会編, 道和書院, 1974, pp. 135-158.
- 8) C. L. Wear, "Construction of Equivalent Forms of an Attitude Scale", Research Quarterly, Vol. 26, No. 1, 1955, pp. 113-119.
- 9) J. A. Wessel & R. Nelson, "Relationship Between Strength and Attitudes Toward Physical Education Activity Among College Women", Research Quarterly, Vol. 35, No. 4, 1964, pp. 562-569.
- 10) 長沢邦子, 丹羽劭昭, 過去の運動部経験がスポーツや体育への意識におよぼす影響, 日本体育学会第27回大会号, 1976, p. 129.
- 11) 丹羽劭昭, 長沢邦子, 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討, 体育学研究, Vol. 23, No. 2, 1978, pp. 109-119.
- 12) 丹羽劭昭, 村松洋子, 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究, 体育学研究, Vol. 24, No. 1, 1979, pp. 25-38.
- 13) 丹羽劭昭, 長沢邦子, 浅井修, 女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討, 体育学研究, Vol. 25, No. 4, 1981, pp. 251-260.
- 14) 荒井貞光, 松田泰定, スポーツ行動に関する実証的研究(2), 体育学研究, Vol. 22, No. 3, 1977, pp. 137-152.
- 15) 西野泰広, 山岡 淳, 平井敏雄, 畠山元彰, 木所正式, ラグビー・スクールの入校動機と効果意識に関する研究, 体育学研究, Vol. 23, No. 3, 1978, pp. 263-274.
- 16) 岡沢祥訓, 石井源信, 賀川昌明, 米川直樹, スポーツマンシップに対する態度の研究—大学女子における態度形成要因について—, 体育の科学, Vol. 31, No. 5, 1981, pp. 362-365.

- 17) 徳永幹雄, 多々野秀雄, 橋本公雄, 金崎良三, スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究(Ⅰ)—ランニング実施に対するFishbeinの行動予測式の適用—, 体育学研究, Vol. 25, No. 3, 1980, pp. 179-190.
- 18) 徳永幹雄他, 現代スポーツの社会心理, 遊戯社, 1985, Pp. 258.
- 19) 徳永幹雄他, スポーツ行動の予測と診断, 不昧堂, 1985, Pp. 246.
- 20) 近藤英男, スポーツ・モラルについての日本と欧米との比較体育的研究, 体育の科学, Vol. 22, No. 12, 1972, pp. 801-805.
- 21) 賀川昌明, 米川直樹, 岡沢祥訓, 石井源信, スポーツのゲーム(試合)における行動規範の研究—小・中・高・大学生に対する調査項目の作成とその尺度構成の試み—, 体育学研究, Vol. 30, No. 4, 1986, pp. 281-292.
- 22) 荒井貞光, 「スポーツの歴史的社会的存在形態の類別基準の試み—日本人のスポーツ観を事例として—」, 体育社会学研究 8, スポーツ行動の文化社会学的基礎, 体育社会学研究編, 道和書院, 1979, pp. 57-80.
- 23) 佐伯聰夫, 「スポーツの文化」, 菅原禮編著, スポーツ社会学の基礎理論, 不昧堂, 1984, pp. 67-98.
- 24) 丹羽勁昭, 金子洋子, 「大学運動部員の態度からみたスポーツの文化的特徴」, 体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究 2, 道和書院, 1983, pp. 1-23.
- 25) MPI研究会編, 新・性格検査法—モーズレイ性格検査, 一誠信書房, 1969, pp. 1-23.
- 26) H. J. Eysenck, General Social Attitudes, The Journal of Social Psychology, 19, 1944, pp. 207-227.
- 27) H. J. Eysenck, The Psychology of Politics, Routledge & Kegan Paul LTD., London, 1954, Pp. 317.
- 28) H. J. アイゼンク, 岩脇三良他訳, 世間知の心理学—実験的社会—, 誠信書房, 1976, Pp. 341.
- 29) G. D. Wilson & H. S. Lee, Social Attitude Patterns In Korea, The Journal of Social Psychology, 94, 1974, pp. 27-30.
- 30) H. J. アイゼンクとG. D. ウィルソン, 塩見邦雄訳, 社会態度 —パーソナリティとイデオロギー—, ナカニシヤ出版, 1981, Pp. 130.

## A Factor Analytical Study on Social Attitudes in Sports

Yūkō KUSAKA, Rey SUGAWARA, Tomio MARUYAMA

The purpose of this study was to develop scale forms designed to quantify the social attitudes in sports, based upon the frame of references of H. J. Eysenck's paradigm of social attitudes.

In order to achieve this purpose, several attitude scales were hypothetically constructed which included traditionalism, authoritarianism, individualism, humanism, equalitarianism, realism-idealism, tough-soft mindedness, rationalism, asceticism and so on.

After two preliminary surveys and the upper-lower item analysis, the questionnaire consisting of 26 items were constructed.

Main survey was conducted to 449 adult sport club members in Sendai city. As a result of principal factor solution with normal varimax rotation, four factors out of 5 were reasonably interpreted as follows; Traditionalism (factor I), Pastime-orientation (factor II), Authoritarianism (factor III) and Rationalism (factor IV).

To simulate Eysenck's two-factor structure, possible partial rotations of initial 5 principal factors were administrated and it was found that using varimax 2 major principal factors were crystallized into Eysenck-like factor structure. They were named Factor A and Factor B respectively.

As a result, Sport Conservatism (FactorA) and Pastime orientation (Factor B) were educed which correspond or have high correlations to Eysenck's Conservatism-Radicalism and Tough-Soft Mindedness factors individually.